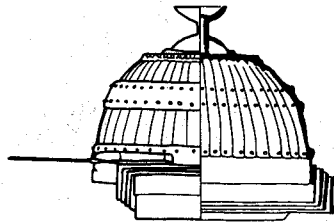


紀 要

第 4 号



1990. 12

財団法人 滋賀県文化財保護協会

21. 太田氏館に関する覚え書き

三宅 弘

1. はじめに

私が滋賀下で発掘調査事業に永年関わりあって来た結果、感じたことがいくつかある。

ひとつは、当然の事であるが、遺跡地図の範囲と実際の発掘調査の結果が異なることである。現在、様々な科学兵器によって地上から土中の世界を探り出そうと試みられているが、完璧とは言えない。

もうひとつは、発掘調査の準備段階における下調べの大切さである。これは、発掘調査と同時に進行してもかまわないと考える。過去の調査結果や周辺の状況、地元での伝承等を頭に入れておくことは、マイナスにはならないであろう。

太田氏館遺跡の発掘調査を開始するに当って、私は以上の事柄に留意した。

この遺跡は太田氏の屋敷跡と伝えられる遺跡である⁽¹⁾。日野牧の地頭職であった太田左兵衛尉は、同族の蒲生高郷に攻められて亡んでいる⁽²⁾。現在、「太田家之墓」と刻まれた石碑を中心に遺跡が範囲づけられている。調査地は南に接した所であり、遺跡地図からは外れている。

現地を見た限りにおいては、土塁や堀跡らしき地形は残されておらず、遺跡地から南東の水田にかけてわずかに微高地となっているのみである。

以下に述べる文章は、太田氏館遺跡の発掘調査に関して行った下調べの内容と発掘調査の一部成果をまとめたものである。

2. 自然的環境

太田氏館遺跡は、蒲生郡日野町村井地先に位置する。この地はかつて蒲生郡が上・下2郡に分かれていたときの上郡に属し、大字村井字安村と呼ばれていた。蒲生上郡の総社と言われていた馬見岡綿向神社の西隣に広がる水田の一面を占めている。

鈴鹿山系から派生する日野丘陵と水口丘陵は、ともに標高250m～300mの低丘陵であり、これらが長く東西にのびている。日野川は、同じ鈴鹿山系の綿向山に源を発してこの両丘陵の間を東西に蛇行しつつ流れている。日野川によって形成された谷筋には、綿向山の北西に聳える龍王山に水源をもつ西明寺川が南西へ向って流れ込み、音羽の付近で日野川と合流する。この谷筋の北端には、日野丘陵に沿って出雲川が西に流れている。三河川によって形成された谷筋は、西に向って次第にその幅を広げていくが、出雲川が日野川と合流する石原付近で狭くなり、再び蒲生町へ向って北西方向に広がりを見せる。太田氏館遺跡は、谷筋のほぼ中央に位置するが、ここより西方がより広い平地となる。

日野川は、蔵王の地より平地を流れるが、現在でもかなり蛇行が認められる。天文年間以降の日野町の中核となった中野城（日野城）と西に広がる城下町は、日野川の北にある。現在は日野

川ダムが建設され、小丘陵を南西に横断して寺尻へぬけている日野川は、天文14（1545）年以前は、中野城の南端をまわり込んで城下町の南に接して流れ、木津に注いでいた⁽³⁾。現在の地形図（1/25,000）ではかなり不明確となっているが、明治24年に作成された大日本帝国陸地測量部の地図には、その旧流路が明瞭に水田化されて残されている。日野川旧流路は、村井・大窪などの街並の南に大きな断崖を形成するが、その崖下に鎮座する瀧之宮神社は、寛文4（1664）年に現地に移転するまでは、南西の河岸にあり、河原社と称していた⁽⁴⁾。現在の社名は、当地境内に雌雄の瀑布があったことから興っている。移転の理由は、河岸に在った当社が、洪水等の災害に度々合うためであると言われる。そうであるならば、天文14年の流路変更時以降も、当地に水は流れていたと考えられる⁽⁵⁾。

この様に、人為的にも流路は変えられたが、また自然的にも流路は変わっていったことであろう。1/10,000の地形図で等高線を追ってみると、仁本木より東側が大きく乱れているのに気付く。現在は小さな水路であるが、北畑から音羽の北端をかすめて仁本木の東で日野川に合流する大きな河道跡も見受けられる。急峻な山間を抜けた日野・西明寺の両河川は、洪水時ともなれば仁本木辺りまでその被害を及ぼしていたものと考えられる。

太田氏館遺跡の北を流れる出雲川は、現在では上流から取水し、水田を潤しているが、田の畦には数多くの井戸が掘られている。また、日野丘陵には大小の溜め池が多数作られている。

日野川の音羽の地には、「大井」と呼ばれる井堰が設けられている。この日野川最古の井堰は、地元で「蒲生のお殿様が造られたものだ」との言い伝えをもっており、そうであるならば定秀の時代に造られたものであろう⁽⁶⁾。

今でもそうであるが、当時も日野川や出雲川は、この谷を深く抉って流れていたと考えられ、そうであればこそ井堰や溜め池などの水田に水を引く土木工事を行う必要があったと考えられる。

3. 歴史的環境

太田氏館遺跡の位置するこの谷筋は、太古から人々の生活に何等かの制約を与えていたようである。それは、前項で述べた自然的条件から来るものであり、それ故、かなり後世に至るまで人間の定着を拒否し続けていたものと思われる。

有舌尖頭器が採集された薬王寺溜遺跡は、西大路の北の日野丘陵南端にある⁽⁷⁾。同じ西大路の水田中に発見された中甲津遺跡⁽⁸⁾や村井から大窪の平地に広がる五斗井遺跡⁽⁹⁾では、石鏃や土器が出土している。縄文時代の遺跡としては、この3箇所のみであり、弥生時代のものは、今のところ全く発見されていない。しかも、これらの遺物は、いずれも明確な遺構に伴ったものではなかった。

遺構を伴う遺跡としては、音羽西古墳や玉塚古墳群などが挙げられるが、直接人間の生活に関与する遺跡ではない⁽¹⁰⁾。

日野川流域のこの谷筋に明確な人間の息吹きを感じられるようになるのは、奈良時代になってからである。

平成元年に調査が行われた五斗井遺跡は、前記の縄文土器が包含層より出土した遺跡であるが、

8世紀の遺物を含む溝が検出されたのに始まり、11世紀までの遺物が土坑や溝から出土している⁽¹¹⁾。

中甲津遺跡では、昭和60・61年度の調査で、先述の石鍬の他に、掘立柱建物7棟など13世紀前半を中心とする遺構が検出されている⁽¹²⁾。

馬見岡綿向神社を挟んで太田氏館遺跡の東に位置する宮ノ後遺跡は、昭和61年度の調査によって13世紀前半の遺物が溝等から出土している⁽¹³⁾。

村井の西端から当遺跡の西や南に接して広がる西中道遺跡からは、昭和62年度の発掘調査によって多数の掘立柱建物・土坑・井戸等が検出され、それらは鎌倉時代から室町時代にかけてのものであろうとされている⁽¹⁴⁾。

以上の様に、太田氏館遺跡の周辺は、奈良時代に始まり、鎌倉時代前半（13世紀前半）頃に至って賑わいを見せてきたと言える。

4. 文献から

日野の地は、蒲生氏によって造られ、蒲生氏とともに発展してきた土地である。前項で見た13世紀前半（鎌倉時代前半）の時期は、蒲生氏一族がこの地に勢力を広げつつあった頃と軌を一にしている。

蒲生家の始祖とされる惟賢が江州蒲生の地を始めて領したのは、年代が詳かではないが、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた頃であるとされている⁽¹⁵⁾。惟賢は正治2（1200）年に死去しているので、それより少し前、すなわち12世紀末頃と考えられる。

6人いる惟賢の男子のうち、本家は長男の俊綱が継ぎ、他の5人はそれぞれ蒲生・甲賀の両郡内に在住して分家の氏を興している。そのうちの一つである儀俄氏は、五男である権五郎俊光が建仁4（1204）年4月に前左馬允藤原重経から、甲賀郡儀俄庄の下司職を譲りうけ、儀俄氏を称したのに始まる。これは儀俄氏の子孫であり、現在は島根県松江市に在住する蒲生鏗市氏が保存していた「出雲国松江市蒲生鏗市氏文書」と呼ばれる古文書に記載されている⁽¹⁶⁾。この文書は甲賀郡内の儀俄庄についての下司職の譲り渡し証文であるが、察するに蒲生郡内に居を構えた他の蒲生一族についても同様に、勢力の伸張を行っていたであろうことは、その後の郡内における蒲生氏の隆勢ぶりを見れば明らかであろう。

蒲生惟賢は、蒲生郡小谷山の裾に住んでいたが、後に仏門に入り恵堯と号してからは、音羽山の裾に閑居したと記されている。蒲生本家は小谷山に居を構えた俊綱が守っていたが、音羽の地が蒲生氏と関係を持つ様になったのは、この頃からであろうか。

その様に考えてみると、当遺跡の周辺が活況を呈するのは13世紀以降に相当すると考えて差し支えない。これは、周辺の遺跡調査の結果と一致する。

太田氏館の位置については、『綿向大明神式法』⁽¹⁷⁾・『近江日野町志』等に記載されている。これらの書物は、いずれも馬見岡綿向神社の西隣の水田の一画が太田氏の屋敷跡であると書かれ、同所に「太田屋敷」なる地名が残されているのである。そこには、自然石に「太田家之墓」と刻まれた墓標とも言うべき記念物があり、傍に榎の木が2本生えている。

この地は、谷筋の広がりと同様に、出雲川も谷筋の中央へと向って流れている左岸にあり、遺跡とされる4枚の水田とそれに南へ続く3枚の水田が、以西の水田より30cm～50cm程度高まっている。出雲川の右岸の、馬見岡綿向神社の北に「太田」という地名が残され、その丘陵一帯を「太田山」と呼んでいるのは、太田氏が領有した土地であるからなのであろう。

さて、太田氏滅亡的一幕は『綿向大明神式法』に詳しい。この書物は、綿向神社の神主である紀昌信が若年の息子重信に家督と神職を譲ったときに、神社の縁起・式法・社歴を併せて記したもので、万治2年（1659）年9月22日の日付けが見える。

綿向大明神式法

神主社大内蔵紀昌信

萬治貳年^{己亥}九月廿二日、采女紀重信二神職并(家督)相渡し候、重信依^{かどく}為^{若年}、綿向式法先規有來通書付相渡し候、

(中略)

1. 大田殿と申は日野谷の地頭なり、則在城は只今神主屋敷なり、當國の御屋形佐々木殿御時代に蒲生殿と大田殿と御中不和の儀依^レ有^レ之、蒲生左兵衛殿法名智閑、大田殿へ弓矢を御取懸有て、大田殿をほろぼし、則當屋敷にて御父子四人一所二御切腹有、一穴にて火葬なされし、則塚屋敷ニ有、…… (後略)

となり、その後太田一族のたたりが甚だしいため、信楽院の住職義道に施餓鬼法要を営んでもらい、以後毎年の8月11日の命日には神主と住職が供養をしているとのことである⁽¹⁸⁾。

『近江日野町志』によれば、太田氏一族が惨殺されたのは大永元（1521）年8月11日と記されている。同書には蒲生貞秀（入道して智閑と号す）の行為となっているが、貞秀は永正11（1514）年に70才で没しているため、本家の秀紀から家督を奪った高郷であろう。彼はまた、その前後に西大路兵部少輔友親（太田氏と同じく蒲生家の家臣で、秀行に中野の地を譲り、安村を領したとされる。）をも攻め滅ぼしており、これらの事実が彼の強引な本家取りの様子を物語ってくれる。

太田氏は、日野牧の地頭職であり、旧族であると『近江日野町志』や『綿向大明神式法』に書かれてある。この事件当時の当主は、太田左兵衛尉と言い、息子は藤七と名のっていたようである。

太田氏館の跡地は、焼亡して後には蒲生家より怨霊鎮護のために綿向神社に譲渡され、仁正寺にあった神主屋敷が同所に移って来たのである。その時期は、大永元（1521）年からそう遠くない日であったと思われる。

5. 発掘調査の状況

太田氏館遺跡は、今まで見て来た様な文献や言い伝え等を根拠にしてその範囲が想定されている。遺跡の現状は、馬見岡綿向神社の西隣に接した水田である。「太田家之墓」と刻まれた自然石を中心にして、水田4面（東西約75m、南北約90m）程度が、その範囲とされている。現地を実見した限りに於ては、土塁・堀等の施設の痕跡は全く見出せない。太田氏館遺跡の範囲内と、南

東に続く神社寄りの水田3面が、それ以外の水田より約30cm～50cm程高くなっているのに気付く。

発掘調査は、遺跡の南東に縦に連なる3枚の水田について行われた。

表土から約30cm掘り下げた所で、黄褐色の遺構面が現れ、遺構は暗茶褐色の埋土を包含して検出されている。中央の水田と南の水田の境の畦下より幅1.7m、深さ0.9m～1.2mのV字溝が発見された。約2mの陸部を残し、南東へは約3mで調査外になったが、北西へは約20mのびて西側の水田との境の水路の下でT字状に直角につづいている。

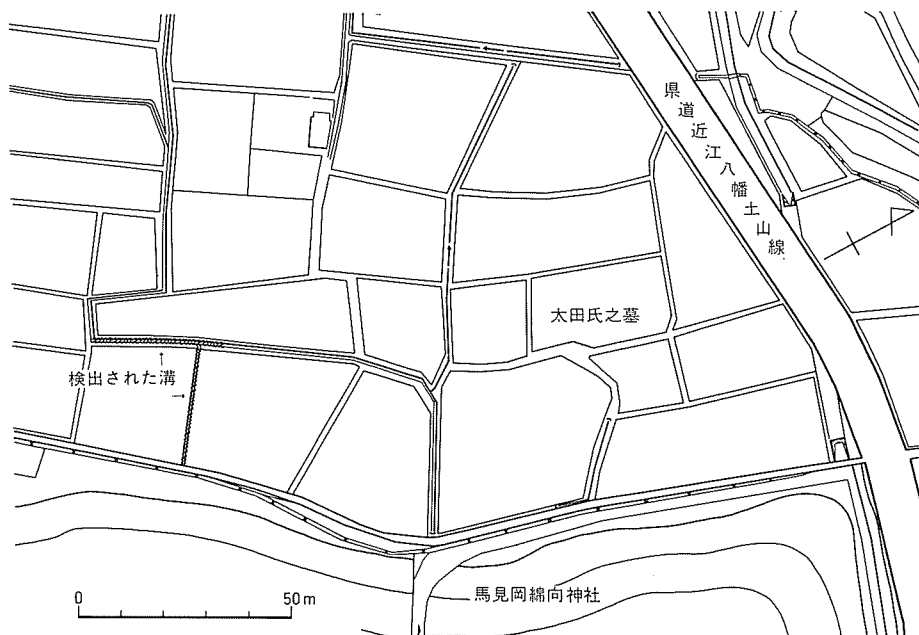
この溝は、埋土の中層に薄い炭化物の層が見られ、焼けた石も入っていた。下層からは、16世紀前半と考えられる土器類が数点出土している。

6. おわりに

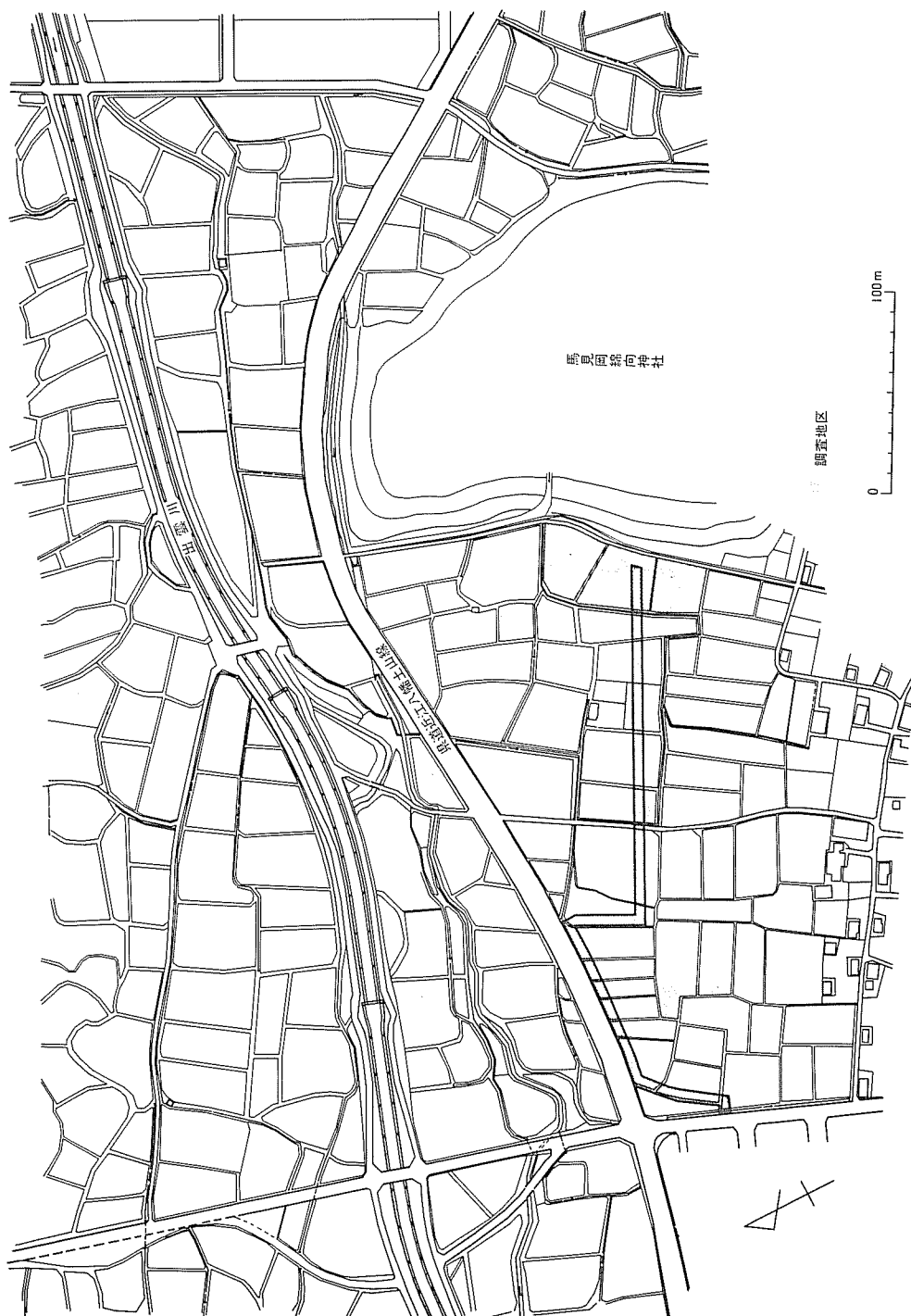
太田氏館は、大永元（1521）年に蒲生高郷によって火をかけられ、全焼した⁽¹⁹⁾。調査地区からは、焼土層は発見されなかったが、溝中層に炭化物の薄い層と焼け石が認められている。その溝は太田氏館遺跡の範囲より50m程南に外れているが、出土した土器類等よりほぼ同時期に存在したものであると言える。

県内の中世居館の調査例としては、八日市市の後藤氏館⁽²⁰⁾、中主町の吉地大寺遺跡⁽²¹⁾・光明寺遺跡⁽²²⁾・近江八幡市の高木遺跡⁽²³⁾などがある。いずれも幅3～10m、深さ1.1～1.5mの堀が1～2重にとり囲むもので、後藤氏館例が長さ一辺100m前後、他は一辺40～70mを測るものである。

太田氏館遺跡で検出された溝は、それらと比較すると幅が著しく狭いものであり、これをもつ



第1図 「太田氏之墓」の位置と検出された溝



第2図 平成2年度調査トレンチ位置図

て太田氏館の堀跡であると断言はできない。しかし、出土した16世紀前半の土器や炭化物層の確認など、太田氏館の存在を想定しうる資料はわずかではあるが発見されている。

今後、これらの資料をもとに、より一層明確な太田氏館の実像に迫っていければ本意である。

尚、文中の挿図トレースについては、澤田恵氏の御協力を得た。末筆ながら、ここに謝意を表

したい。

注

- (1) 滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査』4 旧蒲生・神崎郡の城（1986年）
- (2) 滋賀県日野町教育会『近江日野町志』巻下、487ページ（1930年）
- (3) 瀬川欣一「新人物往来社刊 日本城郭大系における滋賀県編中 日野町関係記事の訂正一覧」
 - (1)（『近江の城』第8号 財団法人滋賀総合研究所 1984年）
- (4) 注(2)に同じ
- (5) 現在も小水路が見られるが、当時においても特に洪水等による被害は著しいものがあったと思われる。
- (6) 瀬川欣一『蒲生家盛衰録』上巻一近江蒲生家の系譜一（サンブライツ出版 1981年）
- (7) 滋賀県日野町教育委員会『日野町内遺跡詳細分布調査報告書』昭和63年度版（1989年）
- (8) 日永伊久男「第2章中甲津遺跡」（『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集 県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 滋賀県日野町教育委員会 1988年）
- (9) 横田洋三氏の教示による
- (10) 注(7)に同じ
- (11) 財団法人滋賀県文化財保護協会『県営かんがい排水事業に伴う五斗井遺跡発掘調査概要報告』（1990年）
- (12) 注(8)に同じ
- (13) 日永伊久男「第3章宮ノ後遺跡」（『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集 県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 滋賀県日野町教育委員会 1988年）
- (14) 注(7)に同じ
- (15) 滋賀県日野町教育会『近江日野町志』巻上 95ページ（1930年）
- (16) 『近江日野町志』巻上（滋賀県日野町教育会 1930年）99ページ所収「出雲国松江市蒲生鏗市氏文書」
- (17) 宇野茂樹 校注 紀昌信「綿向大明神式法」（『神道大系』神社編23 近江国（財団法人神道大系編纂会 1985年））
- (18) 馬見岡綿向神社宮主、社信之氏の教示による
- (19) 注(17)の317ページによる
- (20) 八日市市教育委員会『内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』（八日市市文化財調査報告(2) 1983年）
- (21) 山田謙吾「吉地大寺遺跡第7次発掘調査」（『中主町文化財調査報告書』第3集 中主町教育委員会 1985年）
- (22) 注(1)に同じ
- (23) 仲川靖「近江八幡市高木遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XIV-4 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1987年）

編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成2年12月

紀 要 第 4 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241